

# Be Proactive!



## 運動会を終えて

5月30日（土曜日）は、雲一つない快晴のもと行われた熱い熱い（暑い！）運動会でした。保護者や地域のたくさんの皆様にご覧いただき、生徒たちへのご声援を賜り、誠にありがとうございました。現在の寺島中学校を象徴する、素晴らしい運動会になりました。スローガン通り、「仲間

と走るこの瞬間を、一生忘れない最高の青春に」できたことと思います。これもPTA本部を始め、保護者ボランティアの皆様、寺中地区青少年育成委員会の皆様のご支援のおかげです。深く感謝申し上げます。

この運動会がまれに見る「大成功」と言えるのは、一人一人の生徒がそれぞれの競技に全力で臨み、見ている生徒も一体となって声援を送ったということはもちろんですが、もう一つの大きな要因として、運動会実行委員会や各委員会・部活動部員を中心に、生徒が運動会の成功のため人、係活動を一生懸命に行っていたためです。事前に打ち合わせや練習も行い、会が滞りなく進行するように、責任をもって自分の仕事に取り組んでいました。スローガンの「One for All 熱く燃やせ 寺中魂」の通り、一人一人の力が結集され、あの素晴らしい運動会になったわけです。

しかし、寺中生はここで満足してしまうわけにはまいりません。私は、今回の運動会の取組を見て、生徒たちは自主的によく頑張りましたが、学校として生徒に主体的に運動会を創り上げさせることができたかと言うと、まだまだ改善の余地が残されていると考えています。来年度へ向けて、さらに生徒の力を信じ、生徒に委ね、これまでに見たことのないような、生徒自身が創る運動会に挑戦させたいと考えております。

## 『自主的』と『主体的』の違い

人が自分で考えて行動する姿を、日本ではこれまで「自主的」と表現してきました。これは、人が他者に言われて行動する様子とは逆に、言われなくても自分で判断して行動できるポジティブな態度と評価されてきました。

しかし今、本校が生徒たちに求めているのは、「主体的」な態度です。これは、前号でもお伝えしたとおり日本では新しい考え方で、前述の「自主的」とは、似て非なるものです。この二つの態度は何が、どう違うのでしょうか。



プログラムNo.1 準備体操

「自主的」と「主体的」は、言われないとできない「指示待ち」とは反対に、どちらも「自分で考えて行動する」態度のことを表します。しかし、この二つは「自分で考えて」の動機と範囲が大きく異なります。

簡単な例を挙げて比較してみましょう。子供が「自主的に」宿題や勉強をするのと、「主体的に」するのではどう異なるのか。

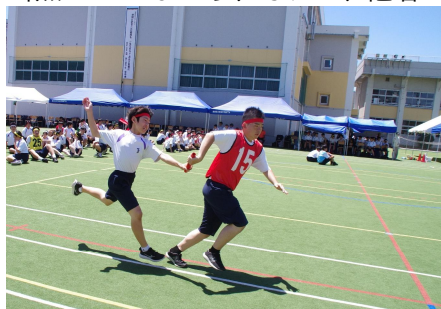
「受動的」、「自主的」、「主体的」の違い		
<b>受動的 (受け身・強制的)</b>	<b>自主的</b>	<b>主体的</b>
言われたことをやる 指示されて動く ↓ 言われないとできない	言われなくてもやる 自分で考えて行動する ↓ (与えられた) 枠の中での行動	自分の意志で行動する 選択そのものを自己決定し、決定したことに責任をもっている ↓ 枠を超えた行動
<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分で考えることはない</li> <li>○失敗を他者のせいにする</li> <li>○キーワード「指示待ち」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○選択肢は他者によって用意されている</li> <li>○選択の判断に他者がどう思うかが影響している</li> <li>○キーワード「忖度」「同調圧力」「外発的動機づけ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○選択・決定の理由は「やりたい」「こうなりたい」 ⇒他者がどう思うかは選択に影響しない</li> <li>○キーワード「内発的動機づけ」</li> </ul>

まず、親や教師ががみがみ「勉強しなさい！」と言うので仕方なくやっている状態は、「強制的に」やらされているにすぎません。この状態の時は、勉強をしてもほとんど身に付きません。(一律の宿題が「百害あって一利なし」と言われるのはこのためです。) ですから、親や教師は、子供が「自主的に」勉強するようになってほしいと望んでいます。

さて、ここで人に言われずとも宿題や勉強をするようになる子供がいたとします。この「宿題・勉強をする」子供(=「行為者」)の気持ちを観察してみるとどうでしょうか。この子供は、それまでの経験上、宿題・勉強をしないと自分に「不利益になる」、または、することが「得になる」と学んでいます。「やらないと怒られる」「成績が下がる」と思い、そうならないように「自分で考えて」やっている。もしくは、「やるとお母さんが喜ぶ」「先生に褒めてもらえる」と思ってやっているということです。このように、「自主的」な態度は、行為者がその行為を「する」という選択をする際に、他者の意志(他者がどう思うか)が強く影響しています。行為者がそれを意識している・していないに関わらず、他者に「忖度」したり、「同調圧力」を感じ取って、または認められたいという欲求から、その行為を「する」という選択をしているわけで、行為の動機は外発的なものです。

別の例で考えてみましょう。今回の運動会では、生徒たちは「自主的に」係活動に取り組んでいました。生徒たちの姿が素晴らしかったのは、上記のような外発的動機づけからではなく、自分から「やりたい!」と思って取り組んでいたからです。それにもかかわらず、生徒の活動が「自主的」なものだったと私が定義するのは、活動そのものが、教師の決めた「枠」の中で行われているものだからです。教師が決めた内容を、教師の指示を得て行っているという点において、生徒の活動は教師の想定した期待値を大きく超えることはありません。別の言い方をすると、教師は、生徒が自分の想定した「期待」を大きく超えることを望んでいないのです。へたに頑張りすぎると、生徒は「勝手なことをするな!」などと言われかねないわけです。

「主体的」な態度は、行為者がその行為を選択する際、他者の意志や枠組みに影響されず、純粋に「やりたい」「こうなりたい」という気持ちが動機となっています。(「内発的動機づけ」による行動) 当然のことながら、それは、他者が決めた「枠」にとらわれない行動、「枠」を超えた行動になります。



自分でやりたいことを、自分の選択したやり方で行うというのは、これまでの日本の社会では推奨されてきませんでした。子供のことで言えば、大人は、それが子供たちの幸せにつながるという「善意」から、子供たちを大人の決めた「枠」に当てはめようとしてきました。本来主体的な存在である子供たちは、こうして主体的になる機会を奪われてきたのです。(つづく)